

# 時間的展望における自己認識と生活実践

佐藤文子<sup>1</sup> 志村結美<sup>2</sup> 深谷純子<sup>3</sup>

<sup>1</sup>千葉大学教育学部 <sup>2</sup>東京学芸大学連合大学院博士課程 <sup>3</sup>福島市立東中学校

## Self Awareness and Life Practice from a Time Outlook

Fumiko SATO<sup>1</sup> Yumi SHIMURA<sup>2</sup> Junko FUKAYA<sup>3</sup>

<sup>1</sup>Faculty of Education <sup>2</sup>The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University, Doctoral Course

<sup>3</sup>Higashi Junior High School

本研究の目的は、青年期の時間的展望における自己認識と生活実践の実態を明らかにすることである。方法は大学生411名を対象にアンケート調査をした。

結果は以下のとおりである。

- ① 「今努力していることが将来に影響する」、「これからの人生や生き方にとっても関心をもっている」という回答が多い。
- ② 大学生の時間的展望における自己認識には学年差と男女差がある。
- ② 他の人を配慮した生活行動をしている。
- ③ 自己認識と生活行動には関連性がある。

The purpose of this research is to clarify the actual conditions of the youths' outlook towards the time in terms of their overall self awareness and life practice. 411 undergraduate students were the target test subjects in this survey.

The results are as follows.

1. Many responded by saying, "Effort now will be rewarded in the future" and "I am very interested in how the future life and way of living will be."
2. There is a difference in the grades and sex of undergraduate students.
3. Life actions are done in consideration of others.
4. There is a relationship between self awareness and life actions.

キーワード：時間的展望 (Time Outlook) 自己認識 (Self Awareness) 生活実践 (Life Practice) 家庭科教育 (Home Economics Education) 青年期 (Youths)

### 研究目的

現在、家庭科教育において、教科が育む「生きる力」は、「個人及び家族の発達と生活の営みを総合的に捉え、日々の生活活動の中で、主体的に判断して実践できる能力を育み、明日の生活環境・文化を創ることのできる資質・能力」と、21世紀プラン<sup>1)</sup>の中で示されている。この中の、「主体的に判断して、実践できる能力」とは、自己実現を志向するプロセスで、自己の価値と照らし合わせて、それに基づいて判断し行動できる能力と解することができる。「自己の価値と照らし合わせる」ことは、自分についての認識を深める行為であり、この自己認識は、自己や家庭を主体的に創造するための基本となるものである。この認識に基づいて実践できる能力の育成が、家庭科教育のめざすものである。

また、上記の家庭科教育で育む生きる力の中で、「個人及び家族の発達」は、人間の誕生から死までを表しており、個人や家族の発達に応じた総合的な生活を考慮す

るとき、時間的展望を持って、自己認識を深めることが必要である。ここにおける「時間的展望」とは、「ある一定の時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体<sup>2)</sup>」である。つまり、個人の過去や未来に対する認知や態度のことである。また、都筑の報告によると、「時間的展望と自己像、生きがい感との間には正の関連があり、未来志向的な青年はポジティブな自己像をもち、生きがい感を強く感じているが、反対に過去志向的な青年はネガティブな自己像をもち、生きがい感が低い<sup>3)</sup>」ことを明らかにしている。

従って、将来を展望した自己認識を行うことで利他的な生活設計ではなく、長い目で将来について考える事によって、希望する人生への具体的な活動の取り組みができるようになる。

本来、時間的展望は、青年期において急激に発達し、認知的発達を基礎としながら、時間的展望の長さ (extension) が広がり、リアリティも高まる<sup>4)</sup>とされているが、現状は、「現代青年は時間的展望の無さの中に在る<sup>5)</sup>」というように、青年達の未来への展望は意外に短い事が報告されている<sup>6)</sup>。また、現在、青少年の生活・精神的自立の遅れについての問題が指摘されており、と

連絡先著者 佐藤文子 教育学部家庭科教育  
e-mail :

りわけ青年期には自分自身を知ること、自分で長期・短期の目標を設定し、目標達成のために自分が持っている資源を有効に使う事ができるような学習が大切とされている<sup>7)</sup>。これらの青年期が将来展望の重要な意味をもつ時期であることから本調査では調査対象者を大学生に設定した。

以上から、本研究は、大学生の時間的展望における自己認識と生活実践の実態把握、および両者の関連について追究し、よりよい自己実現ができるための基礎的知見を得ることを目的とした。

### 研究方法

調査対象は、国立大学教育学部2, 3, 4年生合計411名(男子45.0%, 女子55.0%), 調査期間2000年10月~11月, 調査方法は質問紙留置法(A4版4枚)であった。調査内容は、時間的展望及び生活行動項目45項目における認識度及び実践度について質問した。

### 研究結果

#### 1. 大学生の時間的展望における自己認識の傾向

大学生の時間的展望における認識の構造因子の概要を把握するために、因子分析を行った。第1因子は、「今、希望している人生や生き方は自分なりに実現できそうだ」、「現在自分の才能を十分生かしている」、「将来の見通しは明るい」等から、『現在・未来志向性』、第2因子は「過去に好きだった色やものにとらわれやすい」、「過去の自慢話をよくする」等から『過去への憧憬』、第3因子は「5年後はたいして先のことではない」から『近未来』、第4因子は「はやく大人になりたい」、「1日1日が長いとは思わない」から『成長志向』という因子が抽出された。これらの因子は、過去・現在・未来全ての要素を含んでおり、時間的展望の全体構造を現していることが認められた。また、本調査における大学生の時間的展望の傾向としては、4因子のうち過去志向的な因子が1因子のみである事や、第1因子の『現在・未来志向性』項目が多く、また負荷量も高いことから、大学生の時間的展望における自己認識は現在及び未来志向性の傾向にあるといえる。

また、大学生の時間的展望項目の認識度において、「よくあてはまる」と「ややあてはまる」を合わせた肯定的な回答の割合が高かった上位5項目を、上位から順に挙げると、①「1日1日が長い」とは思わない(84.5%)、②これからの人生や生き方にとっても関心をもっている(83.2%)、③自分が今努力していることが将来に影響する(81.0%)、④毎日が楽しい(78.8%)、⑤これから先、どのような人間になりたいのか、自分なりの目標をもっている(73.2%)となっている(図1~5)。これら上位5項目は、「過去・現在・未来に対する満足」、「未来志向性」の項目のみで、いずれも自分の人生に対する積極性が認められた。

以上から、本研究における大学生の時間的展望における自己認識は、現在及び未来志向性があることが明らかとなった。



図1 「1日1日が長い」とは思わない

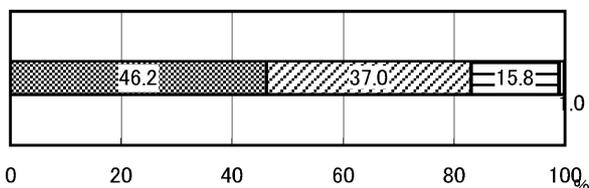


図2 これからの人生や生き方にとっても関心をもっている

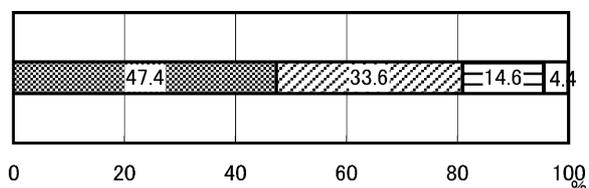


図3 自分の今努力していることが将来に影響する

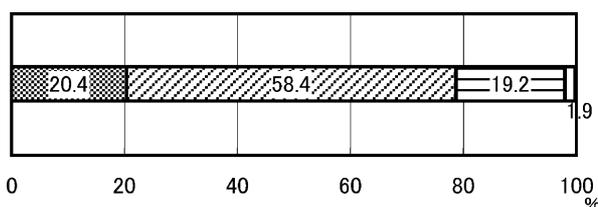


図4 毎日が楽しい

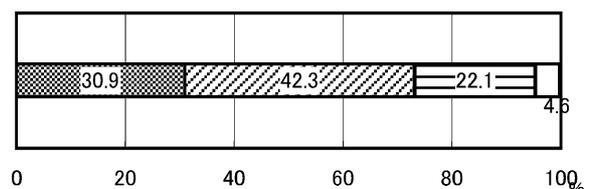


図5 これから先、どのような人間になりたいのか、自分なりの目標をもっている

#### 2. 「大学生の時間的展望における自己認識」の学年差について

「大学生の時間的展望における自己認識」において、学年間で有意差が認められた項目は8項目であった。それらのうち主な5項目は、「これから先、どのような人間になりたいのか自分なりの目標をもっている(図6)」「毎日が楽しい(図7)」「自分は将来どのような人生を送っているのかだいたい想像できる(図8)」「小学生のころのことをよく思い出す(図9)」「将来自分の才能を生かした職業につけると思う(図10)」であった。

次に、全学年(2~4年)において、認識度の高かった10項目(表1)について、学年間の相違をスピアマンの順位相関係数を用いて分析・検討した。その結果、表2のように、3・4年生間の順位相関係数 $\rho =$

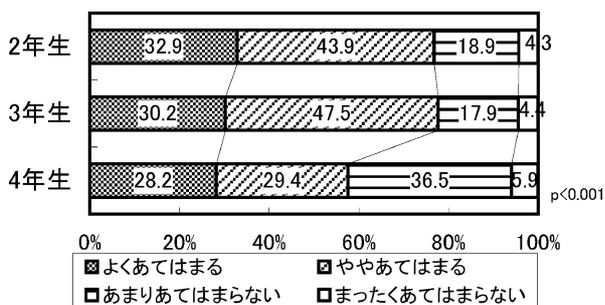


図6 これから先、どのような人間になりたいのか、自分なりの目標をもっている

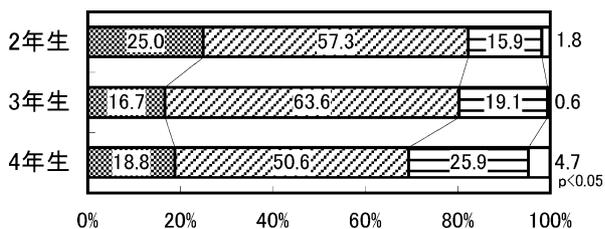


図7 毎日が楽しい

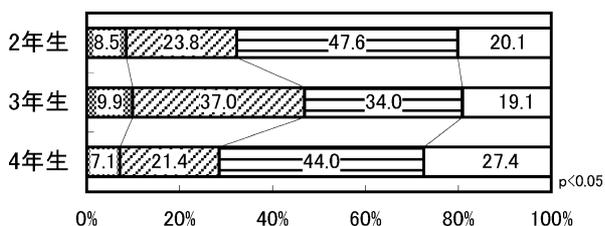


図8 自分は将来どのような人生を送っているのかだいたい想像できる

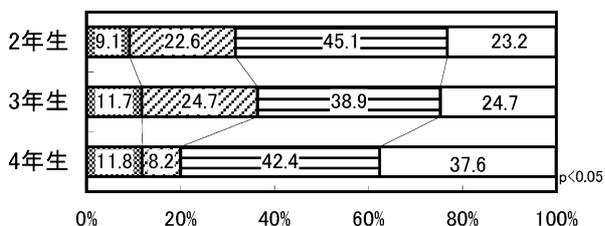


図9 小学生のころのことをよく思い出す

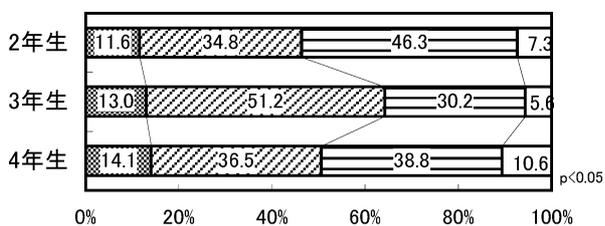


図10 将来自分の才能を生かした職業につけると思う

0.980, 2・3年生間  $\rho = 0.867$ , 2・4年生間  $\rho = 0.836$ であった。全体的に相関が高いといえるが、中でも、3・4年生間の相関が最も高く、次いで2・3年生、2・4年生の結果となり、わずかではあるが、発達段階的な相違が認められた。

以上から、大学生の時間的展望における自己認識にお

表1 大学生の時間的展望項目（認識度の高い10項目）

- a. 毎日が楽しい
- b. 「これまであまりいいことがなかった」とは考えない
- c. 自分の今努力していることが将来影響する
- d. 5年後はたいして先のことではない
- e. これからの人生や生き方にとっても関心を持っている
- f. 小さい時に頑張ったことが今、役に立っている
- g. ちょっとしたことでも未来に希望が持てなくなるようなことはない
- h. 今、希望している人生や生き方は自分なりに実現できそう
- i. 「1日1日が長い」とは思わない
- j. もう一度小さい頃に戻ってやり直したい

表2 時間的展望項目に関する順位相関

〈2・3年生〉

項目	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
2年生	1	5	4	9	3	7	6	10	1	8
3年生	4	5	2	8	1	6	7	10	2	9

$\rho = 0.867$

〈2・4年生〉

項目	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
2年生	1	5	4	9	3	7	6	10	1	8
4年生	4	8	3	9	1	6	5	10	2	7

$\rho = 0.836$

〈3・4年生〉

項目	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
3年生	4	5	2	8	1	6	7	10	2	9
4年生	4	8	3	9	1	6	5	10	2	7

$\rho = 0.980$

いて学年差があることが認められた。

### 3. 「大学生の時間的展望における自己認識」の男女差について

「大学生の時間的展望における自己認識」において、男女間で有意差が認められた項目は7項目であった。それらのうち主な4項目は、「毎日が楽しい（図11）」「もう一度小さいころに戻ってやり直したい（図12）」「過去に好きだった色やものにとらわれやすい（図13）」「現在自分の才能を十分生かしている（図14）」であった。

また、項目統計量結果によると、「よくあてはまる」と「ややあてはまる」を合わせた肯定的な回答において、25項目中14項目で男性よりも女性の方が高いことが明らかとなった。女性の方が、人生における選択肢が多く、人生設計をより現実的・具体的にとらえる必要性があるからと考えられる。

### 4. 大学生の時間的展望における生活行動の傾向

大学生の時間的展望における生活行動の構造因子の概要を把握するために、因子分析を行った。第1因子は、「社会（まわりの人）のために役に立とうとしている」、

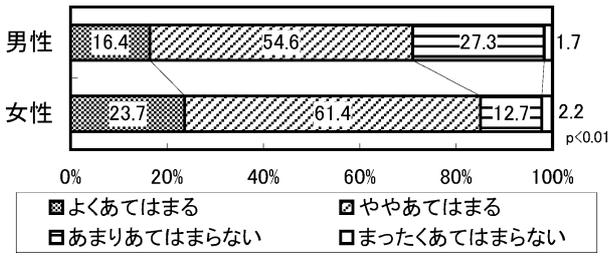


図11 毎日楽しい

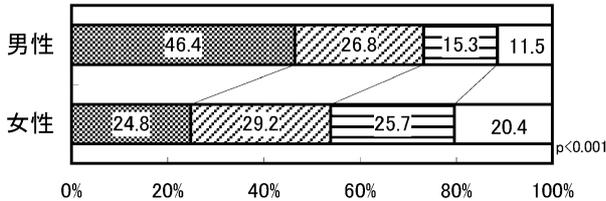


図12 もう一度小さいころに戻ってやり直したい

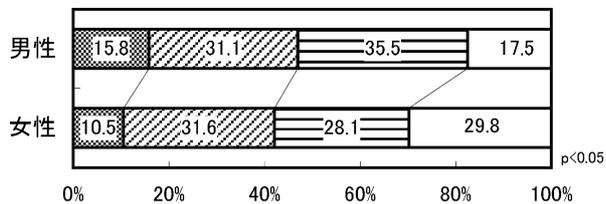


図13 過去に好きだった色やものにとらわれやすい

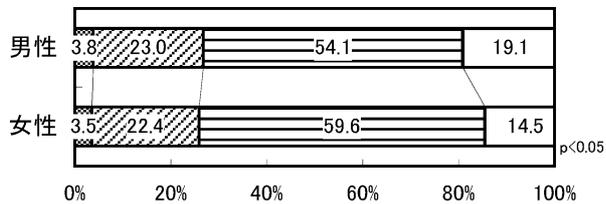


図14 現在自分の才能を十分生かしている

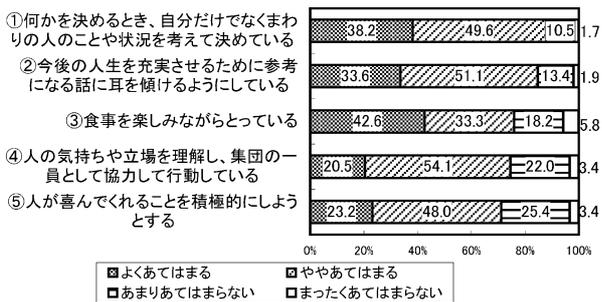


図15 時間的展望における生活行動項目 (上位5項目)

「希望する人生を送れるように、日頃から自分を向上させることを意識的に心がけている」、等から、『現在・未来充実型行動』、第2因子は「自分の目標を達成するために現在努力している」、から『目標達成行動』、第3因子は「着るものの一生を大切に考えた衣生活をしている」、「何かを決めるとき、自分だけでなくまわりの人のことや状況を考えて決めている」等から『他を配慮した意思決定』、第4因子は「食事を楽しみながらとっている」、「自分のライフスタイルに合わせて上手にファースト

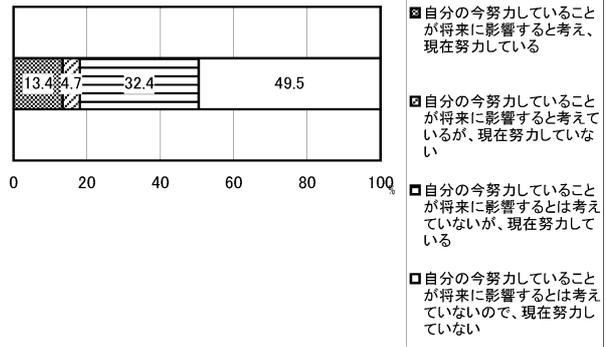


図16 「自分の今努力していることが将来に影響する」と「自分の将来の目標を達成するために現在努力している」との関連性

フードを利用している」から『生活充実行動』という因子が抽出された。これらの因子は、社会的自己実現と個人的自己実現に関わる内容をほぼ網羅していることが認められた。

また、大学生の時間的展望における生活行動項目の認識度において、「よくあてはまる」と「ややあてはまる」を合わせた肯定的な回答の割合が高かった上位項目を、上位から順に挙げると、①何かを決めるとき、自分だけでなくまわりの人のことや状況を考えて決めている (87.8%)、②今後の人生を充実させるために参考になる話に耳を傾けるようにしている (87.4%)、③食事を楽しみながらとっている (75.9%)、④人の気持ちや立場を理解し、集団の一員として協力して行動している (74.4%)、⑤人が喜んでくれることを積極的にしようとする (71.0%) となっている (図15)。これら上位5項目のうち、③を除いた4項目において、「他者への配慮」の要素が含まれていた。すなわち、①、④や⑤の項目のポイントの高いことから、自分だけでなく、まわりの人のことや状況などを考慮した意思決定がなされているといえる。これは、多様な価値を認めながら、自分の価値体系に照らし合わせて、その中から最適な価値を選択していることであり、まさに他者を配慮した生活行動であるといえる。

以上から、本研究における大学生は、時間的展望において他者を配慮した生活行動をしていることが明らかとなった。

### 5. 時間的展望における、自己認識と生活行動の関連性

時間的展望において、本研究の調査項目のうち、自己認識項目と生活行動項目の関連性を分析・検討した主な結果は以下のとおりである。

1) 自己認識項目「自分の今努力していることが将来に影響する」と生活行動項目「自分の将来の目標を達成するために現在努力している」との関連性 (図16)

「自分の今努力していることが将来に影響するとは考えていないので、現在努力しない」が49.5%で最も高く、次いで「自分の今、努力していることが将来に影響するとは考えていないが、現在努力している」が32.4%、「自分の今努力していることが将来に影響するとは考えているので、現在努力している」13.4%、「自分の今努力していることが

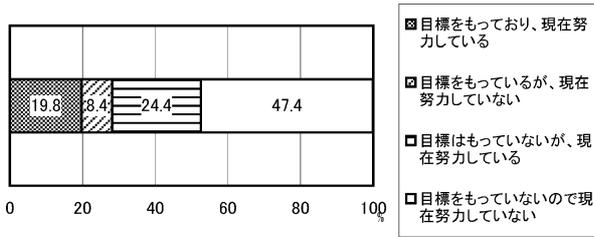


図17 「これから先どのような人間になりたいのか、自分なりの目標をもっている」と「自分の将来の目標を達成するために現在努力している」との関連性

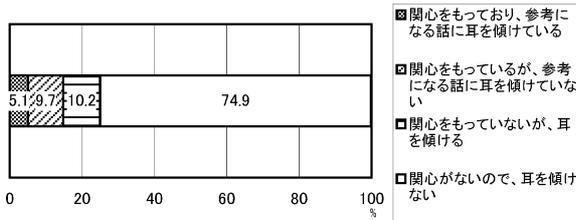


図18 「これからの人生や生き方にとっても関心をもっている」と「今後の人生を充実させるために参考になる話に耳を傾けている」との関連性

将来に影響すると考えているが、現在努力していない」が4.7%であった。尚、「努力が将来に影響すると考え現在努力している」と「努力が将来に影響すると考えていないので現在努力していない」を合わせると62.9%で、認識と実践に相関が認められた。

2) 自己認識項目「これから先どのような人間になりたいのか、自分なりの目標をもっている」と生活行動項目「自分の将来の目標を達成するために現在努力している」との関連性 (図17)

「これから先どのような人間になりたいのか自分なりの目標をもっていないので、現在努力していない」が47.4%で最も高く、次いで、「目標を持っていないが、現在努力している」が24.4%、「目標をもっており、現在努力している」が19.8%、「目標をもっているが、現在努力していない」が8.4%であった。尚、「目標をもっていないので現在努力していない」と「目標をもっているので現在努力している」とを合わせると67.2%で、認識と実践には相関が認められた。

3) 自己認識項目「これからの人生や生き方にとっても関心をもっている」と生活行動項目「今後の人生を充実させるために参考になる話に耳を傾けている」との関連性 (図18)

「これからの人生に関心がないので、参考になる話に耳を傾けていない」が最も高く、74.9%、次いで、「これからの人生や生き方に関心をもっていないが、参考になる話に耳を傾ける」が10.2%、「関心をもっているが、参考になる話に耳を傾けていない」が9.7%、「関心をもっており、参考になる話に耳を傾けている」が5.1%であった。尚、「関心をもっており、参考になる話に耳を傾けている」と「関心がないので参考になる話に耳を傾けていない」を合わせると、80.0%となり、高い相関が認められた。

以上から、「これからの人生や生き方に関心をもつ」

「これから先どのような人間になりたいのか、自分なりの目標をもつ」「自分の今努力していることが将来に影響することを認識する」等の内容は、目標達成のために努力したり、判断のよりどころとなる情報収集等の主体的な生活を創造するための行動と関連していることが明らかとなった。しかし、本研究における大学生の実態としては、認識をもっているものの、生活行動が伴っていないことが認められた。高校生においても認識と具体的な生活行動が伴っていないという志村等の報告<sup>9)</sup>があり、青年期の課題の一つと言えよう。

## まとめ

青年期の時間的展望における自己認識と生活実践の実態を明らかにする目的で、国立大学生411名を対象にアンケート調査を実施した。

結果は以下のとおりである

- ① 大学生の時間的展望における自己認識の構造因子は「現在・未来志向性」「過去への憧憬」「近未来」「成長志向」であった。また、時間的展望項目の認識度において、現在及び未来志向性に関する項目が高いことが明らかになった。
- ② 時間的展望の自己認識項目、「これから先、どのような人間になりたいか自分なりの目標をもっている」「毎日が楽しい」「自分は将来どのような人生を送っているのかだいたい想像ができる」「小学生のころのことをよく思い出す」「将来自分の才能を生かした職業につけると思う」等において学年差が認められた。
- ③ 時間的展望の自己認識項目、「毎日が楽しい」「もう一度小さいころに戻ってやり直したい」「過去に好きだったものにとらわれやすい」「現在、自分の才能を十分生かしている」等において、男女間で有意差が認められた。
- ④ 時間的展望における生活行動の構造因子は、「現在・未来充実型行動」「目標達成行動」「他を配慮した意思決定」「生活充実行動」であった。また、時間的展望における生活行動項目の高かったものは、「何かを決めるとき、自分だけでなくまわりのことや状況を考えて決める」や「人の気持や立場を理解し、集団の一員として協力して行動している」「人の喜んでくれることを積極的にしようとしている」等であり、他者を配慮した生活行動をしていることが明らかとなった。
- ⑤ 自己認識と生活行動の関連性において、認識「現在の努力が将来に影響する」と行動「将来の目標達成のために現在努力している」、認識「どのような人間になりたいのか、目標をもっている」と行動「将来の目標達成のために現在努力している」、認識「これからの人生や生き方に関心をもっている」と行動「今後の人生を充実させるために参考になる話に耳を傾けている」等において、自己認識と生活行動には関連性があることが認められた。しかし、認識に行動が伴わない実態も明らかとなった。

今後の課題としては、時間的展望における自己認識に伴った生活行動を志向して、家庭科教育の教育内容、教育方法の具体的な取り組みを図る必要がある。

引用文献

- 1) 日本家庭科教育学会編. 家庭科の21世紀プラン. 家政教育社, 1997, p. 116
- 2) 都築学. 大学生における自我同一性と時間的展望. 教育心理学研究41(1), 1993, p. 41
- 3) 上掲2)
- 4) 上掲2)
- 5) 吉田昭久, 小熊均, 小倉美智子. Time perspective とPersonalityとの関連Ⅷ—Time perspectiveの心的構造—. 茨城大学教育学部紀要(人文・社会科学・芸術) 39, 1990, p. 57-73
- 6) 尾崎仁美. 青年の将来展望の研究に関する一考察—将来次元の重要性を考慮する意義—, 大阪大学教育学年報4, 1999, p. 94
- 7) 上掲1)
- 8) 志村結美, 佐藤文子. 家庭科における自己実現と経済的自立に関する教育内容の探究—高校生の認識と実態の視点から—. 日本家庭科教育学会誌46(1), 2003, p. 14-26